

### 第3回 感染症科学研究センター研究セミナー開催概要報告

平素より、当センターにご理解いただきまして、誠にありがとうございます。

当感染症科学研究センター（Research Center for Infectious Disease Sciences）は、平成28年4月1日に発足し、第3回の研究セミナーを開催いたしました。前回に引き続いて、サロン形式でお茶を飲みながらのセミナーとしました。猛暑ながら、各施設からもご出席いただき、盛会のうちに終了いたしました。下記に開催概要をまとめましたのでご覧ください。

感染症科学研究センター長 金子 明

日 時：平成29年7月13日（木） 17時30分～19時30分

場 所：阿倍野キャンパス学舎1階 応接室

内 容

□ センター長挨拶 センター長 金子明教授（寄生虫学）

発足からのセンターの取り組みについて説明され、ますます共同研究の取り組みを促進する旨、説明された。



□ 医学研究科細菌学 金子 幸弘 先生

「感染症科学研究センターのネットワークを活用した共同研究への取り組み」

2016年4月1日に発足してからのセンターの取り組みおよび今後の計画の全体像について説明した。臨床感染制御学との耐性菌に対する共同の取り組み、肝胆膵病態内科学および工学研究科との共同で新しい感染症治療薬開発の取り組みについて報告された。感染症治療薬開発では、深海微生物由来の新しいリソースを用いていること、すでにシーズとなりそうな候補物質が取得できていることから、大阪発のものづくりに貢献する夢のある講演であった。



□ 医学研究科公衆衛生学 加瀬 哲男 先生

「大阪府における感染症対策を支持するための科学的根拠」

前職公衆衛生研究所部長および4月に着任した公衆衛生学の特任講師としての活動を報告した。厚生労働科学研究等での、ネットワークを使った研究を紹介し、国レベルのデータベース作成に協力してきたこと、また、その大きな成果として、日本の麻疹排除がWHOから認定されたことを示された。麻疹排除には、検査法の開発などの科学の進歩が大きく貢献していることが分かる講演であった。今後も、大学という立場から様々な発信をして、大阪に、そして世界に貢献する公衆衛生学を目指すことが語られた。



□ 発達小児医学 瀬戸俊之先生

「小児科臨床の現場で直面した問題が発端となった感染症基礎研究」

小児の臨床症例を振り返りつつ、臨床を基盤にした研究について紹介された。「臨床現場は研究の宝の山である。」との言葉が印象的であった。患者を研究材料にするということではなく、「誰一人として同じ経過をたどる患者はいない。」という経験から、一人一人をきちんと考えながら診るといふ医師としての原点から研究を行うことの重要性を示している。ムンプスによる無菌性髄膜炎は、頻度こそ少ないが、頻度の高いエンテロウイルスによる無菌性髄膜炎より重症になりやすいことを臨床的に明らかにし、さらに重症化しやすい髄膜炎を早期に発見するための診断マーカーの開発研究を実施しており、今後の展開が期待

される。

免疫学を専門とする中嶋弘一教授、および、炎症研究を専門とする徳永文徳教授から、髄膜炎の重症化のメカニズムに関する質問などがあり、非常に活発な討議が行われた。



□ 副センター長からの挨拶 副センター長 掛屋弘教授（臨床感染制御学）

最後の挨拶として、基礎、行政、臨床の観点から多岐にわたる発表があり、今後もセンターの活動を活発化させたいと総括された。

□ 謝辞

ご発表の演者の皆様、ご出席の皆様誠にありがとうございました。また、今回の準備に際し、多大なるご協力をいただきました事務方の皆様にも感謝いたします。ありがとうございました。

□ ログマーク決定のお報せ

皆様に投票いただいた結果

候補 4 5 票

候補 3 4 票

候補 7 4 票

候補 8 3 票

候補 9 3 票

候補 2 2 票

となりました。

最も投票の多かった候補 4 に決定いたします。

(候補となったログマークについてはこちらをご覧ください)

黄色（Cの部分）がやや見にくいとのご意見もあり、若干の修正をいたしますが、候補 4 を正式なログマークとして、今後使用したいと思えます。

修正が完了いたしましたら再度ご報告いたします。ありがとうございました。